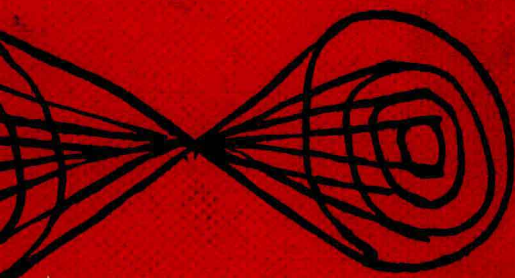


ディケンズ

世界文學大系

29



ディケンズ

荒 涼 館

世界文學大系

29

筑摩書房版

世界文学大系 29

ディケンズ

1969年7月31日初版第1刷発行

訳者 青木雄造
小池滋

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替 東京 4123 電話(291)局7651
郵便番号 101-91

CS 20029

目次

荒涼館

小青
池木雄
滋造
訳
5

ディケンズを読みつつ

ア
青木雄
造
訳
573

解説

青
木雄
造
581

年譜

591

装
幀
庫
田
發

デ
ィ
ケ
ン
ズ

荒涼館

第一章 大法官裁判所

ロンドン。ミクルマス開廷期(解説)もこのほど終り、大法官はリンカン法曹学院(解説)内の大法官裁判所(解説)にいる。十一月のきびしい天候。通りという通りは、さながら洪水がつい今しがた地球の表面から退いたばかりのように、泥にまみれ、これでは、体長四十フィートほどの斑竜が、巨大なとかげのようにホウパン岡をよちよち登つてくるのに出会つても、ふしぎはあるまい。(旧約聖書創世記八章のノアの大洪水を念頭において)煤煙が家々の煙炉の煙突から舞いおり、ぼたん雪ほどもある大きな煤のかけらをまじえた、黒い、しっとりした霧雨になる——太陽の死を悼んで喪服をつけたかのように。犬どもは泥にまみれて見分けがつかない。馬たちもそれにおさおさ劣らぬ有様で、目かくし皮のところまでもはねが上っている。道ゆく人たちはみな不機嫌が伝染して、たがいにくもりがさをぶつけ合い、町かどで足をふみすべらせる。そしてここでは、夜明け(こいういう日にも夜明けがあったとしての話だが)以来、そのほか何万という歩行者が

まずいたり、すべったり、地面につきからつきへと新しい泥をつみかさねるので、泥は歩道に執拗にこびりつき、ねずみ算式にふえてしまつた。

どこもかしこも霧だ。テムズ川の川上も霧で、緑の小島や牧場のあいだを流れている。川下も霧。ここでは、たくさんに並んだ船のあいだや、この大きな(そして薄汚ない)都会の不潔な河岸のあたりを、霧が汚れた渦をまいて流れてゆく。エセックス州の沼沢の上も霧、ケント州の丘陵の上も霧、そして石炭運送帆船の上甲板の賄い所の中へ忍び入る、大きな船の帆桁の上に寝そべる、索具の中をうろつく、はしけや小さなボートの船べりにしなだれかかる。グリニジ海軍病院の病室の煙炉のそばで、ぜいぜい咳こんでいる老廃兵の目やのどの中へもはいりこむ、むかつ腹を立てた船長が甲板下の息苦しい自室の中でふかしている午後のパイプの柄や火皿にはいりこむ、その上の甲板で身ぶるっている、おさない見習い水夫の手や足の指をじゃけんにつねる。橋の上を通りかかった人たちががんかん越しに、空に見まごう下の霧をのぞいている、そのまわり一面も霧で、さながら人々は軽気球に乗って、雲のもやの中に浮んでいるよう。

霧の中からぼんやりガス燈が町のほうぼうに現れる。それは、農夫や鋤ひき馬の手綱をとる少年がよく見かける、海綿のような湿地の畑から太陽が現れる時の光景を思わせる。たいがい

——ガス燈はそれに気づいているらしく、やつれた、気のすまなげな面持ちだ。

底冷えのするこの午後がいちばん底冷えし、濃い霧がいちばん濃く、泥まみれの町なみがいちばん泥まみれになっているところは、鉛頭(なみ)の古いロンドン市自治体の入口を飾るのいかにもふさわしい、あの鉛頭の古い邪魔物、テンブル・バー(田)の上に鉄の忍び返しをつけ、重罪犯人や叛逆犯の首をさしたの近辺である。そしてそのテンブル・バーのほど近く、霧のまつただ中のリンカン法曹学院内の大法官裁判所には、大法官閣下が鎮座している。

いくら霧が濃くなろうとも、いくら泥とぬかるみが深くなろうとも、この大法官裁判所という有害きわまりない老無頼漢が、衆目の一致して見るとおり、今日おちいっている暗中模索とあがきの状態には及ぶべくもない。

少くともこのような午後こそ、大法官は——現にそうしているように——この裁判所に鎮座して、霧のようにもろろとした後光につつまれ、深紅の布とカーテンにやわらかく囲まれて、大きなほおひげをはやした大男のくせに声だけちいさな弁護士から、はてしなく長い訴訟事件摘要書の説明を受けながら、霧のほかにな

に一つ見えるものもない屋根の明りどりを、よそ目に、じつとみつめているべきである。このような午後こそ、数十名に及ぶ大法官裁判所の面々は——現にそうしているように——いつはてるともない訴訟の何千段階目かの仕事に五里霧中で立ち働

がい揚げ足をとり合い、法律のこまかい専門事項にひざまでうずめて手さぐりをつづけ、山羊の毛や馬の毛でつくった仮髪（弁護士が法廷の服に身を固め、これで法律の条文の壁を破ろうと無謀にも頭をうちつけ、芝居の役者さながら、くそまじめな顔をして公明正大を気取っているべきである。このような午後こそ、事件関係のさまざまな事務弁護士は、その中には親の代から引きつづき担当しているものも二、三人あるし、みながもうその事件で産をなしているのであるが、このような午後にてこそ、彼らは一列にならんで、記録係りの机と勅選弁護士（井戸の底に「真理」を席に控え（しかし、この井戸の底に「真理」を採してもむだであろう）の哲学者デモクリトスの「断片」七の「われわれはなに知らない、真理は深いところにあるのだから」）に、それぞれ目の前に訴状、答弁書、再抗弁書、第二答弁書、強制命令書、宣誓口供書、訴訟争点書、裁判所主事への審査報告、裁判所主事の報告、その他あらゆる高価な報告、その山をつみ上げていくべきである——いや、現にそうしているではないか。衰えかけたろうそくがあたりこらに点つたこの法廷がほの暗いのもわりはない。その中に霧が重たく垂れこめて、まるで永久に出てゆかぬぞといったげに見えるのもわりはない。染めつけガラスをはめた窓々が色彩を失い、昼の光を通さないのもわりはない。町の門外漢たちが入口の窓ガラスから中をのぞきこむが、内部のふくろうのような光景を目にし、しとね張りの上段の座から天井

へものうげに反響する、まのびのした弁舌を耳にして、中へはいるのを思いとどまるのもむりはない。その上段の座では、大法官閣下が光を入れない明りとり（下に光を）に眺め入り、そばに随う仮髪すがたの裁判官連は一人残らず霧の峰にうずまつている！　これが大法官裁判所なのである。この裁判所のために亡びかけた家や荒れはてた地所が、国中いたるところの州にある。そのため心身をすりへらした発狂者がいたるところの精神病院にいらし、そのために死んだ者がいたるところの墓地にうめられている。また、そのため破産して、かかとのつづれた靴にすりきた服で、借金をしたり物乞いをしている訴訟者が、どの人の知合いのうちにもいる。この裁判所は金持で力のある者に、正しい者の精根を完全につきはてさせる便宜をはかっている。また財政や忍耐力や勇氣や希望をひどく消耗させ、頭を錯乱させ、胸をはりさけさせるので、ここの弁護士たちのあいだでも、高潔の士はみな次のような警告を与えたいと思うことである——事実、しばしばそうしているのである。「人からどんな不当な処置を受けても、ここへくるよりはむしろ黙って我慢しておいでなさい！」

この霧の深い午後、大法官裁判所にいるのは、大法官、事件関係の法廷弁護士、どの事件にもいつも関係しない二、三人の法廷弁護士、それにさきほど述べた事務弁護士席の連中を別にすると、どのような人たちであろうか？　まず裁判長の下のように、仮髪と法官服をつけた記録係りがいる。それから大法官杖持者とか、令状発給係りとかいうのか、それとも内帟（ないひょう）管掌官とかいうのか、とにかく所定の法廷服をまとった二、三人の役人が控えている。この連中はみなあくびをしている。というのは、「ジャンデイス対ジャンデイス事件」（目下審理中の訴訟）は何年も何年もむかしにひからびるほど絞られて、もう今では一しずくの面白味もしたたり出ないからである。速記者と、判決記録係りと、新聞記者はジャンデイス対ジャンデイス事件の公判になると、いつもほかの常連たちと一緒に引き上げてしまふ。彼らの席は空白になっている。大法官の鎮座している、カーテンに囲まれた聖なる奥の院がよく見えるようにと、法廷になっている大広間の片側の座席の上に立ち上って、じつと中を凝視しているのは、ひしゃげた帽子をかぶった、小柄な老狂女である。この女は開廷から閉廷まで絶えず法廷に来て、なにか不可解な、自分に有利な判決が下されるものと絶えず期待している。人々の中には、この女は、じつさいに、ある訴訟の当事者なのだから、いや、以前はそうだったかという者もいる。しかし、どちらでもよいことなので、たしかなところはだれも知らない。手さげ袋にわずかばかりのがらくたを入れ、書類と称して持ち歩いているが、主なもの紙マツチと枯れたラヴェンダーの花なのである。黄ばんだ顔色をした一人の被告は、これで六度目であるが、身柄拘留のまま出廷して、「身に受けた侮辱をそぐ」ためにみづから申入れをしようと

待ちかまえている。これはある遺産の管理人で、もともと会計の心得など、いっこうになかったと言われているが、収支の勘定をすっかり凝結させてしまったのである。しかし、仲間の遺産管理人たちがみな死んでしまったので、とうてい身に受けた侮辱をそそげそうにもない。そうしているあいだに、この被告の前途の見込みはもうなくなってしまう。もう一人、破産した訴訟者がいる。この男はシュロップシア州から定期的にやってくる、一日の審理が終わると、急に大声をあげて大法官に呼びかけようとするが、いくらさとされてもこの男に理解できないことは、二十数年にわたって自分をみじめな目に会わせて来た大法官が、法律的に自分の存在を全然知らぬということである。いま男はほどよいところに陣取って、大法官にじつと眼をそそぎ、相手が裁判長席を立とうとするやいなや、「閣下！」と満場にひびき渡る恨みの叫びをあげようと身がまえている。この男の顔を知っている、弁護士事務所の事務員らしい連中が二、三人、なにかおもしろいことでもしてかして、陰鬱な天候を少し陽気にしてくるのではないかと、法廷を立ち去りかねている。

ジャーネイス対ジャーネイス事件はいつまでもだらだら長引いている。時がたつにつれて、このこけおどしの訴訟はすっかりこみいってしまつたので、もうだれにもさっぱりわけが分からなくなつてしまつた。しかも一番分らなくつてこまっているのはほかでもない、訴訟の当事者たちである。しかし、これまでに言われた

とおり、だれかれを問わず大法官裁判所の弁護士同士の五分間でもこの事件について話し合えば、訴訟のもとになる事実に関して、ことごとまっこうから意見が対立せずにはいない。この事件には、かぞえきれぬほどの子供たちが生れて関係し、かぞえきれぬほどの若い人たちが結婚してつながりを持ち、かぞえきれぬほどの老人たちが死んでつながりを絶つていった。何十人という人々は事情も理由も知らず、無我夢中のうちにジャーネイス対ジャーネイス事件の当事者になつてしまつたし、多くの家々では一族をあげてこの訴訟に対する伝説的な憎悪の念を受けつた。おさない原告や被告は、ジャーネイス対ジャーネイス事件が解決したら、新しい揺り木馬を買ってあげようと約束されたが、いつか成人して、本物の馬を持つようになり、やがてあの世へ行く足で走り去つてしまつた。みえりうのわしい未成年の被後見人たちは色あせて母親や祖母になり、えんえん長蛇の列をつくつた大法官たちが来り去り、数知れぬ訴訟申立状は単なる死亡者統計表にやつてしまつた。おそらく、いまではジャーネイス家の人たちはこの地上に三人と残っていないだろう。というのは、トム・ジャーネイス老人が絶望のあまり大法官府横町のカフェーで、頭をビストルで射ち抜いてしまつたからである。だが、ジャーネイス対ジャーネイス事件はいぜんとしてわびしい姿を大法官の法廷にさらしつづけ、永遠に解決する見込みがない。

笑いの種になつてしまつた。それがこの事件の唯一の成果なのである。多くの人々にとっては命とりの種になつたけれども、その道の人々には笑いの種になつてゐる。大法官裁判所のどの主事もこの事件の審査報告をつくらせた覚えがある。歴代のどの大法官も、まだ弁護士として法廷に立つていたころ、だれかしらのために「これに關係して来た」ものである。球根のようになんぐりした靴をはき、青い鼻をした法曹学院の老幹部たちは、晚餐後に大広間で開かれる、いわば特別ボートワイン委員会の席上で、この事件についていろいろまいことを言つて来た。事務弁護士の見習生たちはこの事件で法律知識の腕だめしをするのがならわしであつた。前大法官がこの事件をあざやかに処理したことがある。それは高名な勅選弁護士のプロウワーズ氏がある事について、そんなことは空からジャガイモでも降らないかぎり起るまい、と言ふと、それを訂正して「いや、ジャーネイス対ジャーネイス事件でも終らないかぎり、ですな」と述べた時のことである——この冗談は大法官杖持者や令状発給係りや内帛管掌官たちをいたく喜ばせた。

これまでにジャーネイス対ジャーネイス事件がそのむしばまれた手を伸ばして、どれほど多くの訴訟関係者たちをそこない腐敗させて来たかは実に測り知れない問題であらう。上は、書類とじにさし込まれ、とりどり不気味な格好で身もだえしながら塵にまみれている、ジャーネイス対ジャーネイス事件の令状を山なす

ばかり溜め込んでいる大法官裁判所主事から、下は、このいつ果てるともない事件の文書を大法官府規定の語数に従って何千何万ページと筆写して来た、書記局の筆写係り書記にいたるまで、だれ一人として生れ持った性格をきずつけられなかった者はいない。ありとあらゆる口実をもうけておこなう奸策、言い抜け、引伸ばし、奪略、妨害はまことに望ましくない影響を人間に及ぼすものである。事務弁護士のところの少年たちでさえ、チズル氏だのミズル氏だのいうその弁護士が、特別いそがしくて夕飯までずつと先約がある、と大むかしから言い張って、いつもあわれな訴訟者に門前払いをくわせて来たから、ジャーニedis対ジャーニedis事件のために人一倍道徳上のゆがみと策略をもう身につけてしまったのかも知れぬ。訴訟の収益管理人はこの訴訟でかなりの額の金を得たけれども、同時にまた自分の生みの母親の不信の念と、自分の身内に対する侮蔑感とを得てしまった。チズルだのミズルだのは、ジャーニedis対ジャーニedis事件が片づいたら、その未解決の小事件を検討して、ドリズル——これが粗略に扱われた人物である——のためにどれだけのことをしてやれるか調べてみよう、と、あやふやな決心をする悪い癖がついてしまった。ありとあらゆる種類の言い抜け、インチキがこの不運な訴訟によってばらまかれた上に、こういう害毒の圈外に近いところで事件の変遷を眺めて来た人々までが、知らず知らずのうちに、悪い事態を放任して悪くなるに任せる投げやりな習慣と、

世間がうまくゆかないのは良くゆかないように何となく出来ているのだと信じる投げやりな見解におち入ってしまった。

こういう次第で、大法官閣下はぬかるみに囲まれ霧に包まれたまま大法官裁判所に鎮座している。

「タングル君」と呼びかける大法官閣下はこの弁護士殿の雄弁を浴びせられて最近やや落着きがない。

「カカ（閣下）」とタングル氏が言う。タングル氏はジャーニedis対ジャーニedis事件に精通していることでは斯界の第一人者という譽が高い——学校を卒業してからこのかた、その関係のもの以外は一切読んだことがないと見なされている人物である。

「あなたの弁論は大体終わりましたか？」

「いいえ、カカ——論点がいっぱいです——それを述べる義務があると考えます——カカ」という答がタングル氏の口からすべり出る。

「弁護士諸君のうちにまだ弁論をすませない方が何人かおられるはずですか？」と大法官は軽い笑みを浮べて言う。

タングル氏の同僚が十八人、おのおの千八百ページから成る裁定申請概要書を武器にして、十八本のピアノのハンマーよろしくひょいと立ち上り、十八の敬礼をして、人目につかぬ十八の席にどっかり腰をおろす。

「再来週の水曜日に審理を続行することになります」と大法官が言う。というのは、今問題になっているのは訴訟費用の件で、いわば親訴訟と

いう大樹についた、ほんの一つのつぼみにすぎないので、近く実際に落着する見通しがあるからである。

大法官が起立する、弁護士連中が起立する、刑事被告人があわただしく連れて来られる、シュロップシア州の男が「閣下！」と叫ぶ。儀杖係り、令状発給係り、内帑金係りが腹立たしげに静粛にと告げ、シュロップシア州の男をにらみつける。

「さて、そこで」と大法官はなおもジャーニedis対ジャーニedis事件について言葉をつづける、「話は例の少女——」

「カカ、失礼ながら——少年です」とタングル氏が早まった口をきく。

「さて、そこで話は例の少女と少年、その二人の若者についてですが」と大法官は特別はつきりと言葉をつづける。

（タングル氏はしおれてしまう。）

「二人には今日出頭するように命じて、ただ私の私室に来ておりますので、これから私が面会して、二人を伯父のもとに居住するように命令するのが適当かどうか確かめてみます」

タングル氏がまた立ち上る。

「カカ、失礼ながら——死にました」

「二人を」と大法官は二枚重ねの片眼鏡で机の上の書類を眺めながら「祖父のもとにですな」「カカ、失礼ながら——無謀な行為の犠牲者です——脳をやりました」

突然、霧のはずれの方で、非常に小柄な、おそろしく声の低い弁護士がいかにも得意然とし

て起立して言う。「閣下、発言いたしてよろしゅうございますか？ 私はその人物の弁護士です。その人は従兄なのです、何親等かへだたつてはおりませけれども。正確に何親等の従兄か、法廷の各位にお知らせする準備はただ今ちよつとできておりませんが、確かに従兄です」

この発言（それはさながら墓の中からの伝言のような調子で述べられた）を屋根の垂木の間（きず）に反響させながら、非常に小柄な弁護士がどっかり腰をおろすと、もう霧に姿が隠れてしまふ。みな探すけれども、だれの目にも見えない。「私は兩人と話をして」と改めて大法官が言う、「従兄のもとに居住する問題を確かめてみます。この件につきましては、明朝私がこの席についた時にお話ししよう」

大法官が法廷に向つてやおら一礼しようとしたちよどその時、刑事被告人が大法官の面前に連れ出される。おそらく、この被告の凝結状態から出て来るものと言へば、ただ獄に送り帰されることくらいであらうと思われるが、はたせるかな、間もなくその通りになる。シュロップシア州の男が勇氣をふるつてもう一度、例の感情をむき出しにした「閣下！」をやってみるが、大法官はこの男に気づいたのでたくみに姿を消してしまつた。ほかの者たちもみなすばやく姿を消す。放列を敷いた一組の青い袋に大量の書類が装填され、書記たちによつて運び去られる。小柄の老狂女は書類を手にして歩武堂々と退出する。がらんとした法廷にしっかりと錠がおろされる。もしもこの法廷が犯したすべて

の非行と、それがまき起したすべての不幸にも、法廷もろとも錠をおろして、一切を炎々たる火災によつて茶毘に付することができたならば――いや、それこそジャンデイス対ジャンデイス事件の当事者以外の世の人々にとつてどれほど幸せなことであらうか！

第二章 上流社会

同じこのぬかるみの午後、上流社会を一目だけ見ておきたい。この社会と大法官裁判所とはさほどのちがひもないので、一方から他方へ、からすのよう一直線に飛んでゆくことができる。上流社会も大法官裁判所も、先例と慣習の世界である。いわば、雷鳴のあいだじゅう奇妙な遊戯をしたあげく寝すごしているリップ・ヴァン・ウインクル（十九世紀のアメリカ作家ワシントン・ブックス）中の物語「リップ・ヴァン・ウインクル」の主人公。魔法にかけられ城にとじこめられ、百年間眠つてい（た）か、それとも、いつの日か騎士が起しにきて、止つていた料理場の肉焼きぐしがいきおいよく廻り始めるまで、眠りこんでいる美女（十七世紀のフランス作家シャル・ペローの童話「眠れる森の美女」の主人公。魔法にかけられ城にとじこめられ、百年間眠つてい（た）か、それとも、いつの日か騎士が起しにきて、止つていた料理場の肉焼きぐしがいきおいよく廻り始めるまで、眠りこんでいる美女）のうちに、まわりに森ができたが（若）なのだ！

それは大きな世界ではない。われわれの住んでいるこの世界にも限りがあるけれども（これは、殿下、あなたがそこを漫遊され、その向うの虚空の縁までおいでになれば、お分りのとおりですが）、それにくらべてさえ、ほんの一点にすぎない。そこには多くの美点があり、たくさんさんの善良で誠実な人たちがおり、それ相應の

役目を持っている。しかしながら、悪いことには、宝石をつつむ綿とやわらかい毛糸にくるまれすぎているので、もっと大きな、いろいろな世界の突進してゆく音が聞えず、これらの世界が太陽のまわりを廻転している有様をみることでできない。つまり、無感覚におちいつた世界で、空気の欠乏のため、時には成長を阻害される場合もあるのである。

デッドロック家の奥方はパリへの出発に先立つて、数日間ロンドンの邸宅に帰つたが、パリには数週間ほど滞在の予定で、それ以後の行動はまだきまつていない。上流社会の消息通はそういう、パリの人たちをよろこばせているが、この連中たるや上流社会に關することなら、なんでも知っている。それ以外のことを知つたりするのは上流人士にあらずというのだから。今までデッドロック家の奥方は、彼女が日ごろうちとけたさいにいうところの、リンカンシア州の「うち」にいつていた。リンカンシア州では洪水が出た。敷地内の橋のアーチは水びたしになつて押し流された。附近の低地は幅半マイルにわたつて淀んだ河となり、陰鬱な木々が島と化し、水面は降る雨にうがたれて一日中、一帯に孔だらけだ。奥方の屋敷はこの上もなくわびしかった。何昼夜となく、ひどい雨天つづきなので、木々は中まで濡れとおつたらしく、木こりの斧に伐りおとされる柔い大枝小枝は、地上におちても音一つ立てない。ずぶ濡れ姿の鹿どもは、通りすぎたあとに沼を残してゆく。狐銃の銃声はしめつた空中でいきおいを失ひ、降る

雨の背景をなしている、雑木林をいただいた緑の丘の方へ、硝煙がちいさなゆるやかな雲となつて流れてゆく。デッドロック家の奥方の部屋窓の外の眺めは、鉛色の風景に変わり、墨色の風景に変わる。前景の石のテラスの上の花びらは終日雨を浴びて、おもたい雨だれが、古くから「幽霊の小道」と呼ばれている幅の広い石だたみの上に、夜どおし、びしょびしょしたたり落ちる。日曜日には、敷地の中にあるちいさな教会にかがはえ、オーク材の説教壇はつめたい汗をふき出し、あたりには、まるで墓の中にいる昔のデッドロック家の人々のような臭いと香りとがたつた。奥方は（奥方には子供がいな）たそがれそめたころ、私室の中から番人小屋をながめ、格子のついた窓ガラスに映っている明るい火と、煙突から立上る煙と、女に追いかけられた子供が一人、雨の中へ走り出て、折りしも雨具にくるまって門をはいってきた男のきらきら光る姿に出くわすのを見て、すっかり不機嫌になってしまった。「死ぬほど退屈」したというのである。

それゆえ、デッドロック家の奥方はリンカンシア州の屋敷を引揚げて、雨と、からすと、兎と、鹿と、うずらと、雉子とに屋敷を任せられたのである。女中頭が古い部屋部屋を廻つて、よい戸をしめると、世を去つたデッドロック家の人々の肖像はただもう意気銷沈のあまり、しめつぱい壁の中へ姿を消してしまふように思われた。ところで、彼らがこのつぎ、いつまた現れるかというところ、それは上流社会の消息通た

ちにも、たしかなことは分らない——なにしろ、この連中は悪魔と同じように、過去と現在のことはすべて御存知であるけれども、未来のことはなに一つ知らないのだ。

レスタ・デッドロック卿は一介の准男爵にすぎないけれども、彼ほど強大な准男爵は世にいない。家柄の古いことは山におとらず、しかもその高きたるや山などの遠く及ぶところではない。彼の持論によれば、世の中は山がなくては成り立つまいという。自然というものがよいものであることは（ただし、狐園として困いを施されていけないものは、おそらく、やや格が落ちるのである）、彼も大体において認めるのである。うが、自然の効果を発揮させるのは、地方の豪族であると考えている。彼は厳格な良心を持して、一切の卑小卑劣を軽蔑し、いささかでも誠実を疑われるようなことをするくらいなら、むしろ即座に、いかなる死をも、いわれるがままにえらぶといった紳士である。つまり高潔で強情、信義を重んじ気概に富み、きわめて一徹、この上もなく頑迷な人物なのである。

レスタ卿は夫人よりも、たつぷり二十歳は年上である。六十五どころか、おそらく六十六も、いや六十七という年をもふたび迎えることはまずあるまい。ときおり痛風に悩まされるので、歩きかたがややぎこちない。半白の頭髮にはおひげ、洋服の胸もとと袖口に立派なシャツの飾りべりをのぞかせ、空色の上衣には輝くばかりのボタンをいつもきちんとかけて、堂々たる風

采をしている。態度は儀式ばって、威厳があり、いかなる場合にも夫人に対してはいんぎんをきわめ、その容姿の魅力をこの上もなく崇めてゐる。夫人に対する彼のやさしさは、始めて求婚したとき以来少しも変わったことがなく、これが彼のうちにあるロマンチックな感情を示す唯一のやさやかな特徴なのである。

事実、愛すればこそ彼は夫人と結婚したのであった。世間では今でも、彼女には親類さえないなかつたと取り沙汰している。しかしながら、親類などレスタ卿には大ぜいいて、おそらく、それ以上なくとも充分こと足りたのであろう。だが彼女には美貌、自尊心、野心、驕慢な不屈さ、無数の貴婦人に分けても充分なほどの良識があつた。それらに加うるに富と身分とをもつてしたので、まもなく彼女はのし上つてきた。そして今では、もう長年のあいだ、デッドロック家の奥方は上流社会の消息の中心となり、上流社会という木の頂上に位している。

もはや征服すべき世界がなくなつた時にアレキサンダー大王が泣いたことは、だれでも知っている——いや、今ではだれでも知っているはずである、この話はかなりひんばんに物語られてきたから。デッドロック家の奥方は彼女の世界を征服しつくしてしまふと、そういう感傷的な気分にならずに、むしろきわめて冷やかな気分におちついた。困憊のはての落着き、疲れきつた静けさ、疲労のあまり興味や満足感によつて乱されることのない平靜さ、これが戦勝の記念品であつた。彼女はこの上もなく行儀がよい

ので、たとえ明日にでも生きたまま天国へ昇ることを許されたとしても、格別有頂天になりもせず昇天するにちがいない。

彼女は今もなお美しさを保っていて、盛りをすぎたにしても、まだ凋落の秋を迎えるまでに至っていない。彼女の美貌——それはもともと、みめのうるわしさというより、むしろ可憐美といった質のものであったが、上流の身分にふさわしい表情を身につけることによって、典雅にみがき上げられたのである。姿が優美なので、背が高いような印象を与える。だが、じつさいに高いのではなくて、よくボブ・ステイブルズ閣下（「ステイブルズ」という語には「競馬馬飼育場」の意味）がある。以下の彼の言葉は夫人を馬にのぞらえているが神明に誓って断言したとおり、「自分のすべてのポイント（家畜などの体型その他を規定の標準に照して審査する場合の審査項目）」を最高度に生かしている」からである。この斯道（そどう）の泰斗は彼女の仕上げは非のうちどころがないと品評し、とくに彼女の髪の毛を推賞して、彼女こそ全群のうちにでもっとも毛なみの手入れがよい女だといっている。

あらゆる完璧のしるしを頭上にいただきながら、デッドロック家の奥方は（上流社会の消息通の猛烈な追跡をうけながら）リンカンシア州の屋敷を引揚げ、パリへの出発に先立って数日間をロンドンの邸宅で過すために帰ったが、パリには数週間ほど滞在の予定で、それ以後の行動はまだきまつていない。するとロンドンの邸宅へ、このぬかるみの暗澹とした午後、一人の古風な老紳士が伺候する。彼は普通法裁判所専属事務弁護士と、大法官裁判所専属事務弁護

士とを兼ね、光栄にもデッドロック家の法律顧問をつとめているが、彼の事務所にデッドロックと外側に書いた鉄製の書類箱がたくさんにならんでいてところは、まるで准男爵家の当主が手品の貨幣になって、箱から箱へとたえずすり抜けているかのようなのである。老紳士はかつらに髪粉をつけたマキューリーに案内されて、玄関の間を横切り、階段をのぼり、廊下を歩き、部屋部屋をとおひ抜けて（ここは社交シーズンには誠に光りまばゆく、シーズンが終ると誠に陰気っぽい——客にとっては妖精の国、住む人にとっては沙漠）、奥方の前へまかり出る。

老紳士は見るからに古色蒼然としているけれども、貴族たちの婚姻不動産契約や遺言書で相当の財産をたくわえて、いまではひじょうな金持だといううわさが高い。名家の秘密からさし出る神秘的な円光につつまれたまま、人も知るとおり、そういう秘密を黙々と守っている人物なのである。莊園の奥まった空地に立木や羊歯（やなぎ）にかこまれて、何百年も鎮座している高貴な御霊屋でさえ、このタルキングホーン氏の胸の中におさめられたまま人中を漫步しているほど多くの機密を、秘めてはいない。彼はいわゆる旧弊家で——この言葉はふつう、かつて一度も若さを味わったことがないらしいすべての人々たちをさすのである——半ズボンをはいて細ひもしめ、ゲートルか長靴下をつけている。その黒い洋服と、絹か毛糸か知らぬが黒い靴下の特徴の一つは、ぜったいに光らないことである。このきっちりして窮屈な、ものもいわず、輝く光

にも答えない服装は、着ている人によく似ている。彼は職業上の相談をうけた時でなければ、決して話をしない。ときどき、名家の田舎の本宅で開かれる宴会の食卓の片隅や、社交界雀がもてはやすサロンの入口近くに姿を見せる時には、だまりこんだまま、のんびりくつろいでいるが、座にいる人たちはみな彼を知っており、貴族たちのなかばほとんどは立止まって「ごきげんはどうかね、タルキングホーン君」と言葉かけける。その挨拶を彼はおごそかに受けとめ、ほかのいりろな秘密といっしょに胸の奥深くしまこんでしまう。

奥方と同座していたレスタ・デッドロック卿はタルキングホーン氏をよるこんで迎える。タルキングホーン氏の態度には、長年使われた結果レスタ卿の持ちものになってしまったようなところがあるので、卿にはそれがいつも心地よい。自分に対する敬意のしるしと見ているのである。タルキングホーン氏の服装がまた好ましい、そこにも一種の敬意のしるしがあらわれているので。いかにも品がよくて、その上、大体において家来のような服装である。いわば、デッドロック家の法律上の秘密をつかさどる執事、法律関係の地下のぶどう酒倉を管理する召使頭といったところである。

このことをタルキングホーン氏自身は気づいているのだろうか？ 気づいているのかも知れぬし、いないのかも知れぬ、しかし、デッドロック家の奥方を階級の一員——そのちいさな世界の一人の指導者、代表者——として考えた場

合、彼女につながりのあるすべてのことに関しては、次のようなおどろくべき事情があることに注意しなければいけない。奥方は自分のことを、平凡な人間たちの目をもってしてはとうてい測りがたい不可思議な存在と考えている——これは鏡にうつった自分の姿を見てのことで、そのかぎりでは事実そう見える。だが、奥方のまわりを運行しているすべてのいやしい星くずどもは、女中からイタリー歌劇の興行主に至るまでみな、奥方の弱点、偏見、おろかしさ、驕慢さ、気まぐれを知っていて、ちょうどかかりつけの洋裁師が体の寸法をとるような具合に、この上もなく正確克明に奥方の徳性を計算測定しては食いものにしているのである。たとえば新しい洋服、新しい習慣、新しい歌手、新しい舞踊家、新しい型の宝石、新しい小人や大男、新しい礼拝堂、そのほかなんでも新しいものをはやらせようとする。奥方のほうで、自分の面前で平身低頭するよりはかに能がないと考えている、いんぎんな連中は、いろいろな商売の領分にわたっているが、彼らは奥方を赤ん坊のように操縦する方法を心得ているし、彼女のお守りばかりして一生を過している。また至って卑屈な態度でうしろに従っているように、うやうやしく見せかけながら、じつは彼女とその仲間全体を先に立って導いてゆくし、あるいは、ちょうどレミニエル・ガリヴァーがリリパット帝国の大艦隊を引きさらったように、奥方に鉤をかけることによって、仲間全部をひっかけ、さうっていつてしまう。「もしうちのの人たちと話を

をなさりたいのでしたら」と宝石商のブレイズとスパークルはいう——うちの人たちとはデッドロック家の奥方その他の人たちのことである——「世間一般の人間が相手でないということをお忘れなく。うちの人たちは一番弱いところを突かなければいけません、一番弱いところというのはそういう点です」「この品を受けさせるには、みなさん」と絹織物商のグロスとシーンが友人の製造業者たちに向つていう、「うちへこなくちゃいけません、なにしろうちは上流の方々の泣きどころを心得ているんで、上流社会にはやらせることができるんですよ」「もしこの版画を私のお得意先のえらい方々のテーブルに飾っていただきたいというのでしたら」と今度は本屋のスラダリ氏がいう、「また、この小人や大男を私のお得意先のえらい方々のお屋敷へ出入りさせたり、この興行を私のお得意先のえらい方々にひいきしていただきたいというのでしたら、ぜひとも私にお任せ下さい」というのは、私は長らくお得意先のえらい方々の頭株の人たちを研究してきましたし、じつさいのところ、自慢じやありませんが、こういう人たちを思いのままにあやつることができるのです——正直者のスラダリ氏の言葉だけにこれは決して誇張ではない。

それゆゑ、いまデッドロック家の人たちの胸中にどんな考えが浮んでいるのかタルキングホーン氏は知らないのかも知れぬが、知っているということもまた大いにありうる。

「家内の訴訟がまた大法官の法廷で開かれたの

だね、タルキングホーン君？」とレスタ卿は手をさし出して握手しながらいう。

「はい、本日また開始されました」とタルキングホーン氏は答え、奥方に向つて例のとおり、もの静かに一礼するが、奥方は嫉妒のそばの安楽椅子に腰かけたまま、熱さよけのうちわを顔にかざしている。

「むだでございましょう」と奥方はあい変らずリンカンシア州の屋敷のわびしさをその身に漂わせながら、「なにか変ったことがありましたかどうかお尋ねになりました」

「奥方様が変わったこととおっしゃいますような動きは、本日のところ、なにもございませんでした」

「これから先も、永久にございせんわ」

レスタ卿はいつはてるとも知れない大法官裁判所の訴訟に対してなんの不服もない。もともと、それは時間と金のかかる、いかにもイギリスらしく、また立憲国らしいことがらなのである。なるほど、彼としてはこの訴訟に大した興味もなく、ただ奥方とこの訴訟との関係がいわば奥方の唯一の持参金というだけであり、そもそも彼の名前が——つまりデッドロック家の名が——訴訟ごとに出て来ながら、訴訟そのものの名称にならないのは、偶然とはいへ、じつにおかしなことだという感じがなんとなくある。しかしながら彼の考えによれば、大法官裁判所というものは、たといときおり法の遅滞を招き少しは混乱をひき起すにしても、あらゆる物事に永遠の決着（といつても人間の目から見ても

話だが」をつけるために、人間の知恵の極致が、ほかのさまざまなものといつしよに、考え出したものなのである。それゆえ、大法官裁判所に關する苦情を支持し認めてやるのは、下層階級の人間がどこかで——ウオット・タイラー（イギリスにおける一三八）「年の大農民」（イギリスの農民）の如く——謀反を起すのを奨励するよりなものだというのが、大体彼の持論である。

「新しい宣誓供述書が数通提出されましたが、みな簡単なものでございますし、ご迷惑とは存じますが私の主義としまして、訴訟の新しい進行状態をすべて御依頼人の方々に知っておいていただくことにしておりますので」と用心深いタルキングホーン氏は必要以上の責任を負わずに、「それにまた、近々パリへお出かけとうけたまわっておりますので、書類を持参いたしました」

（ついでながら、レスタ卿もパリへ出かけることになっていたが、社交界雀の楽しみは卿の夫人にあった。）

タルキングホーン氏は書類をとり出し、許可を求めて奥方の手もとの、金のおまもり札のようになりさなテーブルの上にのせ、眼鏡をかけ、笠をかけたランプの光で読み始める。

「『大法官裁判所。ジョン・シャーンデイス 対——』」

奥方はそれをささげり、退屈しぐなきまり文句はできるだけ省くようにと頼む。

タルキングホーン氏は眼鏡越しにちらりとながめ、下のほうからまた読み始める。奥方は氣

にもかけず、さげすむように、うわの空でいる。大きな椅子に腰をおろしたレスタ卿は暖炉の火をながめ、冗漫でくり返しの多い法律書類独特の文章を、これも国家の防壁の一つと御満悦になつてゐるらしい。ところが夫人の席は火が熱い上に、手にしたうちは高価な品だがちいさすぎて、美しいほどには役に立たない。それでいずまいを直したひょうしに奥方はテーブルの上の書類に目をとめる——顔を近寄せて眺める——さらに近寄せて眺める——ふいに尋ねる。

「それはだれが書いたのです？」

タルキングホーン氏は奥方のいきいきとした、つねにない調子におどろいて、急に読むのをやめる。

「それがあなたがたのいう法律書体というものですか？」と夫人は無関心な態度に戻って彼をまともにも眺め、うちわをもてあそびながらいう。「そういうわけでもございませぬ。たぶん———」
「そういうながらタルキングホーン氏は筆蹟を調べる——」ここに書いてございます法律書体ぶうの字は、原本の法律書体をまねたものでございましょう。なぜお尋ねでございませるか？」

「ただ退屈でたまらないのをまぎらわすためですわ。さあ、先を読んで下さい、さあ！」

タルキングホーン氏はふたたび読みつづける。

暖炉の火が熱さを増してくるので、奥方はうちわで顔をおおう。レスタ卿はうとうとまどろんでいるが、急にはっと身を起して「えっ、なんと申した？」と叫ぶ。

「はい、恐れながら」とタルキングホーン氏はあわてて立ち上り、「奥方様が御不快のようにお見受けいたしますが」

「目まいがただでございませう」と血のけのうせた唇で夫人がつぶやく、「でも、死んでしまひそうな氣持がします。お願いです、そつとしておいて。ベルを鳴らして、わたくしの部屋につれてゆかせて下さいませ！」

タルキングホーン氏は次の間へ立ち去る。ベルが鳴り、こきざみの足音、ばたばた走る音が入りみだれ、しばらくしてあたりがまた静になる。やがてマキキュリーがタルキングホーン氏にもとの部屋へ引きとつてもらう。

「もう大分よくなった」とレスタ卿は弁護士に椅子を示して、二人だけで書類を読んでくれといいながら、「すっかり心配してしまつた。奥方が目をまわすなどついぞなかったことだが。しかし、この天候はまったく体にさわる——それに、じつさい、あれはリンカンシア州の屋敷で、死ぬほど退屈してきたのだから」

第三章 歩み

私に割り当てられた物語をどう書き出したらよいのか、ほんとうに困つてしまひます。だって私が利口でないことは自分でも知つてゐるのですから。それは昔からいつも知つてゐました。今でも覚えていますが、まだほんのちいさな子供の時分、私はお人形と二人きりになると、よくこういつて聞かせたものです。「ねえ、ドリ

「ちゃん、あたしは利口じやないのよ、それはよく知っているわね。いい子だから我慢してちょうだい！」それでお人形を大きなひじかけ椅子にすわらせ、お人形がうつくしい肌とバラ色のくちびるをして私をみつめていると——いえ、たぶんそうでなく虚空をみつめていたの、でしよう——私はせつせと縫いものをしながら私の秘密をなにからなまでに話して聞かせるのがつねでした。

なつかしいあのお人形！ 私はとても内気な子でしたから、お人形以外の者には、めったに口を開く気になれず、ましてや心のうちを開く気には決してなれませんでした。思い出しでも泣きたいくらいなのですが、ひるま、学校から帰ってくると、二階の自分の部屋へかけのぼり、「あたしの忠義なドリーちゃん、きつとあなたが待っていてくれると思つたわ！」といつてから、床の上にすわってドリーの大きな椅子のひじかけによりかかりながら、ドリーと別れてから私の気づいたことを全部話して聞かせる、ほんとに救われたように感じるのがつねでした。私はいつもよく気のつくたちでした——もちろん、利発だったわけではありません！——黙っているけれども、自分の目の前で起ることがらに気がついて、もつとよく理解したいと思うたちだったのです。私は決して悟りの早いほうではありません。なるほど、だれかある人に心から愛情を感じている場合には、そのような気がします。でも、それさえうぬぼれなのかも知れません。

私はものごころついて以来、ちようどおとぎ話に出てくるお姫さまと同じように——ただそんなに美しくはありませんでしたけれども——名づけ親に育てられました。とにかく、その養母については名づけ親というだけしか知りませんでした。養母はとても、とてもりっぱな人でした！ 毎週日曜日には教会へ三度ゆき、水曜と金曜には朝のお祈りに、講話があればそのたびに出かけて、一度もかしたことがありませんでした。きれいな人で、もし笑つたらまるで天使のように見えたことでしょう（私はよくそう思いました）——でも決して笑顔を見せたことがありませんでした。いつもまじめで、それに厳格でした。自分がとてもりっぱな人でしたから、そのため、他人の至らなさに一生涯眉をひそめていたのです。私は子供と大人の相違というものを充分斟酌した上でも、養母とのちがいを強く感じました。自分があわれな、とるに足らぬ者で、養母の足もとにも及ばないということを強く感じました。そのためどうしても養母に対して打ち解けることができずなでした——いいえ、心で願っているのですが、私に愛することさえできなかつたのです。養母がどんなにりっぱな人で、それにひきかえ自分は不肖の子なのだと考えると、すまない気持で一杯になり、もつとよい子になりたいいつも心から望み、お人形にも、くりかえし、そのことを話しました。けれども養母に対する私の愛し方はやはり至らぬもので、よい子ならば決してあんな愛し方はしなかつたにちがひありません。

きつと、こういうことが原因で私は生れつき以上に臆病で引込み思案になり、ドリーだけを気の許せる友達として頼りにするようになったのでしよう。けれども、こういった傾向を大いに強めるような出来事が、まだ私のごくちいさい時分に起りました。

それまで私は自分のほんとうのママの話聞いたことがありませんでした。パパのことだつて聞いたことはありましたが、パパよりもママの方に関心があつたのです。私の記憶しているかぎりでは、喪服というものを着た覚えがありませんでした。ママのお墓参りにつれていつももらったこともありません。お墓がどこにあるかも教えてもらえませんでした。それでいて、身内の人のためにお祈りをする時には、いつも養母のためにするようにといわれたものです。こういうことが気になるので、うちにいるただ一人の召使だつたミセス・レイチエルに一度ならず話をしたが、ミセス・レイチエルは私を寢床に入れると部屋の明りをとりあげ（この人もとてもりっぱな婦人でしたが、私に對してはさびしくしていました）、「エスタ、おやすみなさい！」とだけいって、出ていってしまふのでした。

私の通っていた近所の学校は女の生徒が七人いて、私のことをかわいいエスタ・サマソンと呼んでくれましたが、私はだれの家へも遊びにいったことがありませんでした。なるほど、みんな年が上で（学校中で私だけがとびきり幼なかつたのです）、ずつと利口で、とても物知りで